

●現地訪問記①

十二年ぶりのアフガニスタン訪問

PMS総院長／ベシャワール会会長 村上 優まさる

昔ながらの生活が戻ってきた

十二年ぶりに訪れたジャララバードは戦争の名残も感じられず、平和に見えた。二〇二二年十二月はまだ暖かく、雨が降らず、山の雪は少なく、冬季は河の水位が下がるはずなのに十分には下がらず、河の中の作

業には支障がある様子だった。

PMSが灌漑した地域では、人々が畑で働き、作物を収穫していた。道路沿いには様々な店が立ち並んでいる。生きた鶏を売る店、牛や羊の肉が吊り下げられた肉屋、山積みされたカリフラワーなどの野菜や果物、衣類などの店が連なり、バザールをなして

いる。学校が終わったのか、カバンを背負った子どもたちが、男の子も、女の子も出てくる。興味津々で我々を見つめていた。

今回の訪問の目的は、中村医師と伊藤和也君の慰霊、そしてPMS事業を視察することであった。行く先々で長老たちから感謝の念を伝えられ、温かい歓迎を受けたことをまずご報告しておきたい。

コット郡のバラコットでの灌漑工事は、これまでのPMS方式とは異なっている。水量の少ない急流の小さな川からの灌漑用水路が山肌に沿って造られようとしている。「小さな川」といっても五kmを超える山々がなす谷は大きく、自然の規模の大きさ、荒々しさは想像以上で、巨礫がゴロゴロしている。こんなところに堰を造るのかと唾然とするが、PMSの技術者と支援室技術アドバイザーの大和さんが熱心に協議を重ねていた。

目を少し上に向けると、そそり立つ崖の大きさ、広々と開ける紺碧の空が全てを包み込んで、静かな村の風景となる。そう、平和なのだ。中村医師が予測したように、この地域でも戦争が去って、難民となった人々が自分たちの力で戻ったのである。人口が増え、耕作地を拡大するの力を貸して欲しいとの村人の希望に添って灌漑作業は始まった。「昔ながらの生活」すなわち「安心」が求められているのだ。それ以上のことを村の人々は望まない、とは中村医師の言葉である。

ベシャワールの明と暗

アフガン入国の前に訪れたパキスタンのベシャワールでは、元PMS基地病院の事務長として中村医師を支えたイクラムラさんと旧交を温めた。彼は今、医療系、特にリハビリテーション教育機関を運営している。その一環でDr. Tetsu Nakamura Memorial Libraryが開設されたので、共に祝い、協力を約束した。彼はまた、昨年八月に起きた大洪水の被害者救済の活動もしており、惨状が残る活動地に案内してくれた。

中村医師ゆかりのベシャワール・ミッション病院も訪れた。想像以上に以前の施設のまま、しかも整っている姿に安堵した。中村医師の記憶も留め、また誇りにしていることも分かった。ただパキスタンでのハンセン病対策はさらに後退し、ミッション病院では完全にその機能を失い、公営の病院ですら風前の灯のようで、薬剤などの供給も不十分ということ聞いた。中村医師が心血を注いだハンセン病根絶計画は、共に働いたスタッフ、システムともに消失する方向にあり、断腸の思いである。何か手を打つべきか、思案をめぐらせている。

耕作地は二万三〇〇〇haに

アフガン東部では治安の改善が目覚ましい。タリバン政治体制への批判は様々あるかもしれないが、何より戦闘が無くなり、欧米軍の撤退だけでなく、ISなどの外国勢力の排除も進んだことを人々は評価し、現

政権を受け入れられている。

州の経済局からはPMS事業（特に灌漑事業）の一層の拡大・強化を期待されているが、これからも淡々と、粛々と事業を進めることが肝要だと思ふ。政治的な出来事には関与せず、人々の苦しみに焦点を合わせるものが大切であると中村医師は説いていた。

動画や写真で目にした大河や堰を実際に見ると、その大きさに茫然とする。まさに、「百聞は一見に如かず」である。訪問の回数を増やさなければ、と思ふ。

JICA（国際協力機構）が国連無償援助で計画しているPMS方式の普及事業も大切である。FAO（国連食糧農業機関）とPMSが協力して実際の灌漑事業を進めながら訓練する試みが具体化しつつある。

ドラエヌール診療所の医療活動拡大を望む声も医療スタッフから強くあった。

二三〇haのガンベリ農場整備は順調に進み、中村記念塔がある公園への訪問者は多く、人々の憩いの場になっている。公園敷地を二倍に拡張する計画がある。

PMS事業によって人々が戻り、農業が復興した。PMSが作ったのは灌漑施設で、その後は村の人々が工夫して農地が広がっていったのである。二〇一九年に耕作地は一万六五〇〇haであったが、今回の訪問で二万三〇〇〇haに増えていることが判明した。人口も大幅に増加しているだろう。アフガニスタンの人々の自由な意思に任せた中村医師の見通しの確かさを再確認した。地球温暖化の影響がこの地域に大きく現

れていることは確かである。ケシユマンド山脈の雪は極端に少なく、またスピンガル山脈の麓は干ばつと、時に襲ってくる洪水

の被害が甚大だ。今後の干ばつに備えるために我々にできることは何か。支援者の皆様と共に考えていきたいと思えます。